

「総合的な学習の時間」における価値ある体験学習のあり方

— 東京都武蔵野市教育委員会「セカンドスクール」の実践を通して —

中野 真志 (愛知教育大学生活科講座)

小松 沙矢香 (愛知教育大学大学院 生活科教育領域)

A Study about Valuable On-site Learning in the Period of Integrated Learning

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

Sayaka KOMATSU (Graduate Student, Aichi University of Education)

要約 今日、核家族化による人間関係の希薄化、生活に必要な知識や技能等の欠如など、子どもたちが抱えている様々な問題を改善させるために、「体験学習」の必要性は高まっている。本論文では、総合的な学習において、先駆的な「体験学習」を行っている武蔵野市教育委員会の「セカンドスクール」を取り上げ、分析・考察を行った。それによって、価値ある「体験学習」にするための4つの必要条件を明らかにした。それは、(1) 体験だけで終わらせないこと、(2) 体験をする側と受け入れる側が継続的にかかわること、(3) 受け入れる農山漁村の活性化を視野に入れること、(4) 子どもの主体的な問題解決や探求活動のための体験活動であること、である。これらはまた、他の学校においても、総合的な学習において価値ある「体験学習」を行うために有効な条件となると思われる。

Keywords : 体験学習, 総合的な学習, セカンドスクール

はじめに

現代の子どもたちは、核家族化による人間関係の希薄化、生活習慣の乱れによる生活に必要な知識や技能及び習慣や態度の欠如など、様々な問題を抱えている。このような問題を改善するために「体験学習」が重要であると考えられてきた。それゆえ、生活科が誕生し、その後「総合的な学習の時間」(以下、総合的な学習と記す)が設置されたのである。このような教科や時間において、子どもたちは日常生活では困難になった自然との豊かなふれあい、協同活動、多様な人々とのかかわりを通して、心を豊かにすること、基本的な知識や技能、習慣や態度を身に付けること、良い人間関係を築く力を発達させることが期待されたのである。

今日の社会的な状況において、今後ますます「体験学習」の必要性が高まっていくと考えられる。本研究では、総合的な学習における先駆的な「体験学習」を行っている東京都武蔵野市教育委員会の「セカンドスクール」を取り上げ、分析・考察することで、総合的な学習における「体験学習」のあり方を明らかにしたい。¹

I. 「セカンドスクール」の概要

武蔵野市教育委員会では、小学校5年生と中学校1年生を対象として、自然豊かな農山漁村に長期滞在をする「セカンドスクール」を行っている。ここでは、普段の学校生活(「ファーストスクール」)ではあまり経験できない体験学習を、授業の一環として行っている。およそ1週間の滞在の中で子どもたちは、農産物の収穫作業、地引き網体験、地域性のある施設見学、民芸品の製作、ハイキングの中での植物観察など、多くの体験学習を行っている。

(1) 「セカンドスクール」の目的

- ①自然とのふれあいを通して、物質的な豊かさの中で失われてきている自然と人間との共生、環境保全の必要性、自然に対する畏敬の念などについて体験し、自然を大切にしようとする態度を育てる。
- ②長期の宿泊による生活時間を活用し、生活上の自立に必要な知識・技能の生活習慣を身に付けるとともに、一人一人の子どもの創意を喚起し、情操を涵養し、個性の伸長を図る。

- ③学習の場を移し、自然や地域の特性を生かした教材開発や学習方法を工夫し、一人一人の子どもに新たな興味・関心を喚起し、学習のつまづきを克服するとともに、体験に裏付けられた生きた学力の向上を図る。
- ④自主的な集団生活や地域の人々との交流を通じて、子どもたち相互の協力や子どもと教師との間の信頼関係と人間関係を深め、また、保護者や地域の人々に対する感謝の念を育てる。²

(2) 「セカンドスクール」の活動の経緯

「セカンドスクール」は、3年間の試行を経て平成7年度より武蔵野市内の小学校全12校で実施され、平成9年度からは中学校全6校でも実施が開始された。

平成10年度には、平成14年度から全面実施される「総合的な学習」を見据えた活動内容が摸索され、各学校において創意工夫した実践が行わるようになった。

平成11年度は、民宿の方とのふれあい、現地の小学校との交流、民話を聞くなど、人と人とのつながりの大切さを学ぶ機会を多くの学校で取り入れた。

平成12年度からは、総合的な学習を「セカンドスクール」に位置づけての実施が始まった。また、事前に一人ひとりの子どもが課題を明確にもち、現地での体験等を通じた課題研究を行った。事後には、「セカンドスクール」についての発表や、現地との継続的な結びつきを深める活動等を実施した。

平成14年度には、さらなる充実・発展に向けて「セカンドスクール充実検討委員会」を設置し、「武蔵野市小中学校セカンドスクール実施要綱」³を施行した。

平成15年度からは、小学校4年生を対象とし、「セカンドスクール」での学習効果をさらに高めることを目的とした、2泊3日の短期宿泊体験学習「プレセカンドスクール」の試行が始まり、平成17年度から全面実施された。また、11月には「農山漁村の豊かな自然を活かす体験教育推進フォーラム」にて、「セカンドスクール」の事例発表とシンポジウムを行った。2月には、「第1回オーライ！ニッポン大賞」の大賞を受賞した。

II. 「セカンドスクール」の実践の分析・考察

(1) 目的・方法

「セカンドスクール」は、総合的な学習の特設後多くの活動を総合的な学習に位置づけて行うようになった。それは、総合的な学習を「セカンドスクール」に取り入れるにあたり、総合的な学習の趣旨やねらいを意識したからであろう。本研究は、総合的な学習の特設によって、「セカンドスクール」がどのように変化

したのかを見ることで、総合的な学習において価値ある体験学習をするための示唆を得ることを目的とする。

毎年度武蔵野市教育委員会から出される報告書、学校通信などから分析・考察を行った。具体的には、全12校ある小学校の中から第四小学校を取り上げ、「セカンドスクール」実施2年目の平成8年度、総合的な学習を意識しはじめた平成10年度、総合的な学習が全面実施された平成14年度、一番最近の平成19年度の4年間の活動内容及び児童・保護者の感想を比較し分析した⁴。また、「セカンドスクール」の事前・事後学習の内容についても第四小学校を取り上げ、事前・事後学習を導入した平成12年度、総合的な学習が全面実施された平成14年度、最新の平成19年度の学習内容を比較し分析した⁵。

(2) 分析

①事前・事後学習の導入

第一に、総合的な学習の特設にあたって「セカンドスクール」が大きく変化した点は、平成12年度から、本格的に事前・事後学習を取り入れたことである。それは、総合的な学習でいわれている「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題解決する資質や能力を育てること」⁶というねらいを達成できるような体験活動にするために取り入れたのではないか。そうすることにより、子どもたちは明確な目的をもって活動に臨めるため、現地での学習効果を高めることができる。事後の学習としては、課題学習の成果や「セカンドスクール」の感想を発表会として行うなどしている。そこには、保護者やセカンドスクールの訪問先の人が招かれており、人とのつながりを意識したものになっている。それは、「開かれた学校づくりの一層の推進」⁷が各学校に要請されたからであろう。

②「プレセカンドスクール」の実施

第二に、総合的な学習の特設にあたっての「セカンドスクール」の大きな変化として、「プレセカンドスクール」の実施を挙げることができる。「プレセカンドスクール」は、「セカンドスクール」での学習効果をさらに高めることを目的とし、小学校4年生を対象とした。「プレセカンドスクール」では、課題別学習、郷土食作り体験、農産物の収穫体験などを行っている。「セカンドスクール」と同様、「プレセカンドスクール」も多くの時間を総合的な学習に位置づけている。また「プレセカンドスクール」の目的には、「…セカンドスクールの内容との関係性及び系統性を十分に踏まえ、学習効果及び学習意欲を高めること。」⁸とある。子どもにとっても教師にとっても「プレセカンドスクール」を行うことで、「セカンドスクール」に向けての不安を減らすことができ、また計画的な事

前学習の進行やスムーズな現地での集団行動ができるようになると考えたのである。「プレセカンドスクール」を行った結果、子どもたちは集団生活のルールを学んだり、「セカンドスクール」への期待を膨らませたりすることができた。また教師や学校にとっては、健康面や生活面で支援の必要な子どもを把握することができたと述べられている⁹。

③宿泊形態の変化

第三に、報告書より「セカンドスクール」の宿泊先に注目した。

図1から、全員同じ施設に宿泊する学校が減り、何人かのグループに分かれ民宿へ分泊する学校が増えてきていることが分かった。

民宿への分泊を行う学校では、活動の中に民宿ごとの活動を取り入れることが多く見られるようになった。事前学習の中で、子どもはそれぞれ宿泊する民宿へ、自己紹介のあいさつや「セカンドスクール」の中でどのようなことをしてみたいかという希望を手紙に書く。そうすることで民宿の方々は、子どもの希望に添った民宿ごとの活動を取り入れて下さる。これらの活動では、少人数の活動になるため、一人ひとりの子どもの興味関心のある活動を行いやすく、より一層子どもが主体的に取り組む活動が展開できるようになるからである。これらは、「児童の実態に応じて…中略…児童の興味関心に基づく学習…中略…を行うものとする。」¹⁰という総合的な学習の趣旨1と、「主体的に

活動に取り組む態度を育てる」¹³という総合的な学習のねらい2を意識した変化だと言えよう。また、武蔵野市立第四小学校平成10年度の実践における保護者の感想を見てみると、「民宿に分泊したことにより、民宿の方々とお近づきになったり、より友達とお近づきになったり、精神的に落ち着いて過ごすことができたように思います。」¹⁴という感想が述べられている。このように、落ち着いて過ごす中で、民宿の方々と同じ宿泊場所の友達とのかかわりが深められるようになったのではないかと考えられる。多様な人々とかかわることが苦手な子どもたちにとっては、このような民宿への分泊は教育的な効果があると考えられる。

(3) 考察

以上見てきたように、総合的な学習の特設にあたって「セカンドスクール」は様々に変化している。事前・事後学習や「プレセカンドスクール」を取り入れて、見通しを持った活動や継続的な学習をすること、宿泊形態の工夫から人とのかかわりを深めたり子どもの興味関心に基づく活動をしたりすることなど、学習効果を高める工夫が見られた。しかしその一方で、今後さらに教育効果の高い総合的な学習における体験学習を行うためには、下記のような課題があるのではないかと。

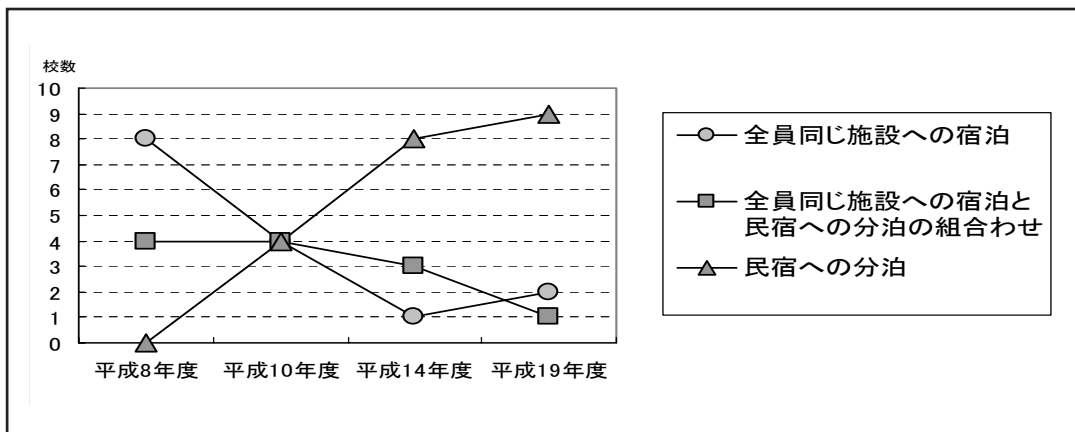
①子ども同士の交流の不足

何人かのグループでの分泊をし、民宿ごとの活動を

表1 宿泊形態の変化¹¹

	H. 8年度	H. 10年度	H. 14年度	H. 19年度
全員同じ施設への宿泊	8校	4校	1校	2校
全員同じ施設への宿泊と民宿への分泊の組合わせ	4校	4校	3校	1校
民宿への分泊	0校	4校	8校	9校

図1 宿泊形態の変化¹²



取り入れたことにより、「セカンドスクール」中の異なるグループの子ども同士の交流が不足しているのではないかと推測する。民宿周辺に掲示板を設け、各民宿での活動を報告したり、課題別学習のグループ活動の報告をしたりする工夫も見られるが、異なるグループの子ども同士が直接かかわる活動が少ないと感じる。現地でも中間報告会を開くなどして、子ども同士が情報を共有し、共感することや、教え合いや学び合いをすることができるというのではないだろうか。平成10年度と平成11年度の報告書には、一つひとつの活動にゆとりをもってゆっくりじっくり活動する¹⁵とあるが、現地でも子ども同士の交流が深められるような時間をとるなど、さらに活動を厳選する必要があると考える。

②活動の企画に対する子どもの参画

「セカンドスクール」の活動のほとんどが、教育委員会や各学校の教師で企画されている。総合的な学習で重要とされている主体性を、さらに高めるためには、児童に一部でも活動の企画から携わせるなどの改善が必要であろう。そうすることによって、子どもの活動への参加意欲が高まるからである。そのためにも、自分のしたい活動を提案し、計画し、実行できる子どもの能力を育てることが重要である。

③総合的な学習への体験学習の適切な位置づけ

今回の学習指導要領の改訂による今後の課題もある。平成23年から全面的に実施される新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」における体験活動に関して、「体験活動については、…目標及び内容を踏まえ、問題解決や探究活動の過程に適切に位置づけること。」¹⁶が強調されている。「セカンドスクール」の実施開始は、総合的な学習が特設される7年前のことである。総合的な学習が実施される以前は、国語・社会・理科・家庭科・図画工作など教科のみで構成されていた。総合的な学習が特設されてからは、総合的な学習が活動の最も多くの時間を占めるようになってきている。例えば、平成16年度の武蔵野市第三小学校5年生の実践では、「セカンドスクール」での活動を次のように教育課程に位置づけている。総時数48時間のうち国語5時間・社会7時間・算数0時間・理科6時間・音楽1時間・図工4時間・家庭3時間・体育4時間・道徳1時間・学科4時間・総合13時間である。総合的な学習との関連を意識した活動が多く取り入れられているが、今後問題解決や探究活動の過程に体験活動を適切に位置づけるということを再検討する必要がある。

Ⅲ. 総合的な学習における価値ある「体験学習」の必要条件

以上、総合的な学習の特設にあたって「セカンドス

クール」の変化を分析・考察することで、総合的な学習において価値のある体験学習の示唆を得ることができた。以下先行研究の分析と考察を含めて、総合的な学習における「体験学習」の必要条件を述べたい。

(1) 体験活動だけで終わらせないこと

総合的な学習における体験学習は、体験活動だけで終わらせてはいけないということが言えよう。「セカンドスクール」では、事前・事後学習、現地での課題別学習を行っている。それに関連することで、鈴木正行は「『総合的な学習の時間』における他地域を対象とした学習活動の意義として、事前学習、現地での追究活動、事後学習という一連の学習活動を行うことで、子どもに地域調査の方法を身に付ける機会を与えることができる」¹⁷という事前・事後学習の重要性を述べている。

また、平成19年度の第五小学校では、「セカンドスクール」での豊かな自然体験をきっかけに、日本、世界へと視野を広げて自然環境を守るためにできることを考えようという活動を行った。このように、その後の総合的な学習へ発展したという展開が見られた。

体験だけで終わらせないことについては、「食農教育—子どもが変わる農村宿泊体験—」の中で、NPO法人当別エコロジカルコミュニティー（TEC）代表の山本幹彦も、体験したことを学びにつなげることが大切であると述べている。山本は、次のように述べている。「一人ひとりで違う体験の意味を学びにつなげるには、どのような体験をしたのかを一人ひとりに聞けばよいのです。『何か気づいたことある？自分で発見したことって何かな？』…中略…と指導者が質問を投げかけていきます。」さらにそのとき、指導者も一緒に体験をして子どもの気持ちに寄り添うことが重要であり、そして、子どもの気持ちに共感し対話を進めることで、体験の意味をお互い明確にし、理解していくことができると主張している¹⁸。

(2) 体験をする側と受け入れる側が継続的にかかわること

継続的なかかわりの一つとして、「プレセカンドスクール」と「セカンドスクール」を同じ地域で行うことが挙げられる。そうすることで、人とかかわりを深くもつことができたり、初夏と秋というように季節の違いによる変化に気づくことができたり、自然の変化や季節ごとの生活の知恵を知ることができたりする。

二つには、子どもが事前学習、現地での活動、事後学習と継続的に受け入れ側とかかわることができる。その意義は、上の(1)体験だけで終わらせないことで述べた通りである。

三つには、より長期に渡って継続的に学ぶために、

4年生で実施する「プレセカンドスクール」や、6年生で「セカンドスクール」を伝える活動を行っていることが挙げられる。「プレセカンドスクール」では、「セカンドスクール」がより一層充実したものになるように関連をもたせた活動をしている。6年生になってからは、これから「セカンドスクール」に行く5年生に対して「セカンドスクール」の説明を行っている。それによって学校内での異年齢による学習を取り入れやすくなり、カリキュラムの縦のつながりができる。

また、特定の受け入れ側と継続的にかかわることは、次の(3)で挙げる、農山漁村の活性化につながっていくと言える。

(3) 受け入れる農山漁村の活性化を視野に入れること

農山漁村における体験学習では、体験をする子どもの側だけでなく、受け入れる農山漁村の活性化効果も期待できる活動であるべきだと考える。

そのことは、平成20年度よりはじまっている「子ども農山漁村交流プロジェクト」からその必要性が明らかだと言える。総務省、文部科学省、農林水産省が連携して行うこのプロジェクトは、小学校高学年が農山漁村で1週間程度の宿泊体験活動を行うもので、地域の教育力の維持や地域の活性化を推進しながら、子どもたちの体験につなげていく新たな教育事業である。それはまた、農山漁村経済への波及効果を期待した地域復興事業としても注目されている¹⁹。このことから、自然の中での様々な体験には教育的な効果や農山漁村の活性化が見込まれていることが分かる。

また、飯田市役所の「ツーリズム」と「まちづくり」からも、受け入れる農山漁村の活性化の重要性を感じることができる。飯田市は、高齢化率が25.9%と高く、少子化も進んでいる。また、地方の財政難、地域コミュニティの弱体化という課題を抱えている。そのため、自立度を高め、持続可能な地域社会の確立を目指している。そうした中での体験交流型観光における農業・農村体験は、教育的な部分にのみ位置づけられているのではない。食の生産現場として、食に関する知識の伝達や団らんの中での食事を通したふれあいなど、教育的な位置づけが見られる一方で、地域自給率を伸ばすことや、自分たちの地域のよさを見出し、仕事や地域に誇りをもつことができるようになることにも目が向けられている²⁰。

以上のことから、農山漁村における体験学習は、受け入れる農山漁村の活性化を視野に入れることの重要性がうかがえる。

(4) 子どもの主体的な問題解決や探究活動のための体験活動であること

体験学習がどのように取り扱われているかは、総合

的な学習における体験学習のあり方について考える上で重要な要素である。Ⅱ.「セカンドスクール」の実践の分析・考察(3)考察③で述べたように、子どもの主体的な問題解決や探究活動の過程に体験活動を位置づけることが大切である。

また、特別活動に位置づけられてきた自然体験活動や野外活動を単純に総合的な学習にあてることが批判されていることから、この重要性が分かる。羽賀他によれば、特別活動における体験活動のねらいは、集団活動により社会性を育成すること、リーダーシップを育成すること等が挙げられる。また、自然、社会の事物、現象を五感で捉えることにより人間的感性を育成することも挙げられ、それは総合的な学習のねらいと重なる。しかし、総合的な学習に位置づけられる体験活動は、問題発見、問題解決、体験活動、表現活動といった流れの中にあり、教科の枠を超えて、主体的、創造的な「生きる力」の育成を導くための「学び方」と「生き方」の学習でなければならぬと主張されている²¹。つまり、特別活動としての体験学習は、総合的な学習としての体験学習とは同じ扱いはできないということである。以上のことから、総合的な学習へ体験学習を適切に位置づけることが重要である。

おわりに

以上4つの点に、総合的な学習における体験学習の意義とあり方をまとめることができた。これらは、教育効果の高い体験学習を行うにあたっての必要条件になるのではないか。

以下、本研究において明らかになった今後の研究課題について述べる。

一つには、自然豊かな地域の子どもにおいても核家族化や少子化の影響によって、外で遊ぶ子どもが減ったり、自然や社会、人々にかかわる機会は少なくなったりしている。また農業の機械化により、農村部の子どもであっても農業体験の経験は乏しいことが指摘されている²²。自然豊かな地域の子どもにも、社会や自然、人々にかかわる体験学習が必要であると考えられる。

もう一つは、「セカンドスクール」のように、都会の子どもが農山漁村で体験学習を行うような実践では、子どもだけでなく教師も体験が不足していることがあるのではないかと推測する。それは、「食農教育—子どもが変わる農村宿泊体験—」で飯田市企画部企画幹井上弘司の以下のコラムからも明らかである。そこでは、家畜の役目を理解していない教師が紹介されており、机上の知識はあっても本物を知らない教師が増えていることが指摘されている。体験学習において教師はカリキュラム・コーディネーターであり、広く浅く総体を理解するために、教師にも事前学

習の必要があると述べられている²³。

これらのことから、今回は都会の子どもたちが体験学習をする「セカンドスクール」の実践について考察したが、体験学習は都会の子どもだけでなく農山漁村部の子どもや教師にも必要性があると分かった。今後は、農山漁村部の子どもを対象にした体験学習や、体験学習における教師の知識および能力や経験にも注目し、総合的な学習における価値ある体験学習の構成や展開について研究を進めていきたい。

- 1 小松沙矢香「体験学習における『都市・農村交流』の在り方」静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科、平成19年度卒業論文参照
- 2 『平成18年度 セカンドスクール・プレセカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平19年3月）2頁
尚、この目的は平成8年度から18年度まで一貫している。
- 3 『平成14年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平15年3月）3-4頁
- 4 資料1は、筆者が以下の書を参考にして作成した。
『平成8年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平成9年3月）
『平成10年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平11年3月）
『平成14年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平15年3月）
『平成19年度 セカンドスクール・プレセカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平20年3月）
- 5 資料2は、筆者が以下の書を参考にして作成した。
『平成12年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平13年3月）
『平成14年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平15年3月）
『平成19年度 セカンドスクール・プレセカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平20年3月）
- 6 『小学校学習指導要領解説 総則編』文部省（平成11年5月）45頁
- 7 同書、11頁、92-94頁参照
- 8 『平成19年度 セカンドスクール・プレセカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平20年3月）5頁
- 9 同書、33頁、51頁、57頁、125頁、137頁、141頁、145頁、157頁参照
- 10 『小学校学習指導要領解説 総則編』文部省（平

成11年5月）44頁

- 11 表1は、以下の書を参考に筆者が作成した。
『平成19年度 セカンドスクール・プレセカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平20年3月）6-7頁参照
- 12 図1、同上
- 13 同書、45-46頁参照
- 14 資料1参照
- 15 『平成10年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平11年3月）1頁
『平成11年度 セカンドスクール実施報告書』武蔵野市教育委員会（平12年3月）3頁
- 16 「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間」文部科学省（平成20年8月）36-38頁
- 17 鈴木正行「『総合的な学習の時間』における他地域を対象とした学習活動の意義と課題」新地理：日本地理教育学会誌51（2）（2003年）38頁
- 18 『食農教育 — 子どもが変わる農村宿泊体験 —』社団法人農山漁村文化協会（2008年4月増刊号）62-63頁参照
- 19 「子ども農山漁村交流プロジェクト～120万人・自然の中での体験活動の推進～」総務省、文部科学省、農林水産省
http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/nouson/pdf/070831_1a.pdf#search='子ども農山漁村交流プロジェクト'（2008年6月12日検索）参照
- 20 井上弘司「持続社会を創るツーリズムの実践」（平成19年）参照
- 21 羽賀敏雄・野呂徳治・田名場忍・小山智史「総合的な学習の時間と体験活動 — 付属教育実践総合センター研究員の研究成果を踏まえた考察 —」弘前大学教育学部研究紀要クロスロード第6号（2002年）37頁参照
- 22 『食農教育 — 子どもが変わる農村宿泊体験 —』社団法人農山漁村文化協会（2008年4月増刊号）94-97頁参照
- 23 同書、64-65頁参照

付記

本論文は、日本生活科・総合的学習教育学会第17回全国大会（山形大会）自由研究発表会の資料を加筆・修正したものである。また、中野の監督と指導の下、小松が執筆した。

本研究を行うにあたり、ご多用の中、資料の送付や質問への対応など、ご協力をいただきました武蔵野市教育委員会の方々に深く感謝いたします。

資料2 武蔵野市立第四小学校 事前・事後学習の内容

実施2年目 平成8年度 長野県高遠町 5月6日	実施2年目 平成14年度 長野県飯山市戸狩 7月8日	実施2年目 平成19年度 長野県飯山市戸狩 7月8日
<p>《自然体験的な活動》 木をさがそう 草、花をさがそう 動物をさがそう 石、工をさがそう 音をさがそう 岩魚のつかみどり さばく 炭焼き 星空観察</p>	<p>《自然体験的な活動》 鍋倉山ハイキング ホタル観察</p>	<p>《自然体験的な活動》 プナの森ハイキング 田植え体験</p>
<p>《学習体験的な活動》 高遠町史跡めぐり (ウオークラリー) 土笛、藤細作り</p>	<p>《学習体験的な活動》 飯山編の旅 ・西大滝ダムの見学 ・飯山市美術館の見学 ・伝統産業会館の見学 ・寺めぐりスタンプラリー</p>	<p>《学習体験的な活動》 雪国のくらしを学ぼう 課題別学習(4回) ・インタビュー活動 ・ビデオや写真撮影 ・植物や生き物観察 ・郷土料理作り ・アスパラ刈り体験 プナの森ハイキング</p>
<p>《生活体験的な活動》 野外炊事(2回)</p>	<p>《生活体験的な活動》 はし作り とうふ作り 笹すし作り</p>	<p>《生活体験的な活動》 はし作り わらぞうり作り 宿ごと体験(2回) (1回目) ・うわ作り ・竹馬作り ・そばもち作り ・そばうち 黒豆の苗植え ・釣り (2回目) ・うどんうち ・ジャム作り ・そばうち ・野草ハン作り ・竹工作 いちご狩り わらぞうり作り</p>
<p>《その他の活動》 焼き瓶クラフト 竹馬作り わらぞうり作り</p>	<p>《その他の活動》 焼き瓶クラフト 竹馬作り わらぞうり作り</p>	<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>
<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>	<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>	<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>

資料1

武蔵野市立第四小学校 主な活動内容の変遷

総合を意欲した活動開始 平成10年度 長野県飯山市戸狩 6月7日	総合の前実施 平成14年度 長野県飯山市戸狩 7月8日	最新 平成19年度 長野県飯山市戸狩 7月8日
<p>《自然体験的な活動》 鍋倉山ハイキング ホタル観察</p>	<p>《自然体験的な活動》 プナの森ハイキング 田植え体験</p>	<p>《自然体験的な活動》 プナの森ハイキング 田植え体験</p>
<p>《学習体験的な活動》 飯山編の旅 ・西大滝ダムの見学 ・飯山市美術館の見学 ・伝統産業会館の見学 ・寺めぐりスタンプラリー</p>	<p>《学習体験的な活動》 雪国のくらしを学ぼう 課題別学習(4回) ・インタビュー活動 ・ビデオや写真撮影 ・植物や生き物観察 ・郷土料理作り ・アスパラ刈り体験 プナの森ハイキング</p>	<p>《学習体験的な活動》 和紙漉き体験 「聞く・漉く・見る」 「聞く」 ・内山紙の歴史や原料 ・和紙の構造 「漉く」 ・漉き ・プレス ・乾燥 「見る」 ・工房の中の見学 ・コウゾなどが和紙になるまでの過程 漁業体験 ・地引網体験 ・水産業に関する話を聞く ・せり見学</p>
<p>《生活体験的な活動》 はし作り とうふ作り 笹すし作り</p>	<p>《生活体験的な活動》 はし作り わらぞうり作り 宿ごと体験(2回) (1回目) ・うわ作り ・竹馬作り ・そばもち作り ・そばうち 黒豆の苗植え ・釣り (2回目) ・うどんうち ・ジャム作り ・そばうち ・野草ハン作り ・竹工作 いちご狩り わらぞうり作り</p>	<p>《生活体験的な活動》 はし作り わらぞうり作り 宿ごと体験 ・竹馬作り ・そばもち体験 ・草餅作り ・豆腐作り ・バームクーヘン作り</p>
<p>《その他の活動》 焼き瓶クラフト 竹馬作り わらぞうり作り</p>	<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>	<p>《その他の活動》 お別れ夕食会(宿ごと) ・出し物(劇、歌など) ・フレセント(色紙、手紙、手作りのもの)</p>

資料2

武蔵野市立第四小学校 事前・事後学習の内容

事前・事後学習導入 平成12年度 長野県飯山市戸狩 6月7日	総合的な学習の全面実施 平成14年度 長野県飯山市戸狩 7月8日	最新 平成19年度 長野県飯山市戸狩 7月8日
<p>《事前学習》 ○「飯山ってどんなところ」(総合小単元) ○調べ学習のテーマ選択 ・飯山市について ・飯山の動物(プナの森、草花など) ・戸狩の人々とくらし ・飯山市の気候(雪が多く降るわけ、東京との違い) ・飯山市の農業(米・きのこなど) ・飯山市の歴史 ・飯山市の伝統工芸と特産品(内山和紙、飯山仏壇など) ・能生の漁業 ○課題追求 ・飯山市の社会科副読本や観光パンフレット、図書館から収集してきた資料やインターネットで取り寄せた資料などを活用した課題解決 ○中間発表会 ・情報の共有化 ・現地での追究課題の明確化</p>	<p>《事前学習》 ○「飯山ってどんなところ」(総合小単元) ○調べ学習のテーマ選択 ・飯山市について ・飯山の動物(プナの森、草花など) ・戸狩の人々とくらし ・飯山市の気候(雪が多く降るわけ、東京との違い) ・飯山市の農業(米・きのこなど) ・飯山市の歴史 ・飯山市の伝統工芸と特産品(内山和紙、飯山仏壇など) ・能生の漁業 ○課題追求 ・飯山市の社会科副読本や観光パンフレット、図書館から収集してきた資料やインターネットで取り寄せた資料、現地の方々への取材活動で得た情報などを活用した課題解決 ○中間発表会 ・情報の共有化 ・現地での追究課題の明確化</p>	<p>《事前学習》 ○「飯山ってどんなところ」(総合小単元) ○調べ学習のテーマ選択 ・飯山市について ・飯山の動物(プナの森、草花など) ・戸狩の人々とくらし ・飯山市の気候(雪が多く降るわけ、東京との違い) ・飯山市の農業(米・きのこなど) ・飯山市の歴史 ・飯山市の伝統工芸と特産品(内山和紙、飯山仏壇など) ・能生の漁業 ○課題追求 ・飯山市の社会科副読本や観光パンフレット、図書館から収集してきた資料やインターネットで取り寄せた資料、現地の方々への取材活動で得た情報などを活用した課題解決 ○中間発表会 ・情報の共有化 ・現地での追究課題の明確化</p>
<p>《事後学習》 ○「セカンドスクールのまとめよう」 (総合小単元) ○課題別グループごと発表方法 ・壁新聞(自作資料) ・紙芝居 ・製作実演 ・劇化 ○セカンドスクール交流会 (「宿の方々、保護者を招待」各宿ごとのグループで会場の準備、思い出を振り返る出し物の準備) ・会の運営 ・お米の炊き出し、豚汁作り(保護者) ◎「14年生にセカンドスクールを伝えよう」(総合小単元) (校内ウェブ作り) ・4年生に自分の作ったページを紹介</p>	<p>《事後学習》 ○セカンドスクール学習発表会(セカンドスクール2週間後) ・課題別グループごとに発表(ポスターセッション方式) ・保護者を招待 ○セカンドスクールを伝えよう~(2学期)ちのホームページ作り~(11月末) ○セカンドスクール交流会(11月末) ・「宿の方々が、収穫したお米や農産物を持って訪れる」体育館で餅つき ・保護者も招待</p>	<p>《事後学習》 ○ホームページ作り ○学習発表会・セカンドスクール交流会(11月初め) ・グループごと発表 ・宿の方々が収穫したお米や農産物を持って訪れつき ・保護者も招待</p>

